

# 子どもの提示的呼びかけについての一考察 — 保育所1・2歳児クラスにおける参加観察から —

中 島 寿 子

## A Study of Childrens' Calling and Showing Behaviors : by Participant Observation in One- to Two-Year-Old Nursery Classes

Hisako NAKASHIMA

### Abstract

I observed 1-2 year old children in a nursery, considering childrens' calling and showing behaviors.

As a result, I classified childrens' calling and showing behaviors from the 25 cases in a one-year-old class into 7 groups. From the 130 cases in a two-year-old class, 5 more groups concerned with childrens' calling and showing behaviors were found. Also, a change was seen in these group contents from the one-year-old class, showing some children with more individual characteristics. I found that not only did children merely want to show things or acts, but they also had various feelings involved.

Lastly, I considered how "awakening of self-consciousness" was revealed in the contents of these calling and showing behaviors by children.

Key words: calling and showing behaviors, 1-2 year old children, nursery, self-consciousness

### 抄 録

保育所1・2歳児クラスの子どもたちを対象に参加観察をし、子どもの提示的呼びかけについて検討した。その結果、1歳児クラスの25事例から提示的呼びかけの内容として7つの内容が整理された。2歳児クラスの130事例からは、提示的呼びかけの内容として新たに5つの内容が整理された。また、1歳児クラスで整理した内容の中にも変化が見られ、内容に個人的特徴がある子どもも見られた。

そして、このような提示的呼びかけには、単にモノや行為を見せたいだけではない、様々な思いが込められていることも考察された。

最後に、この提示的呼びかけの内容に子どもの「[私]という自己の意識のめばえ」がどのように表れているのかについても検討した。

キーワード：提示的呼びかけ、1・2歳児、保育所、自己の意識

## 1 問題と目的

保育所や幼稚園で子どもたちと生活を共にしていると、「みて」「みてて」と呼びかけられることがよくある。このような子どもの他者への呼びかけについて検討した先行研究に、幼稚園児を対象とした福崎(2000, 2001a, 2001b, 2002, 2003)の研究がある。この研究では、子どもの他者への「み

て」「みてて」という呼びかけを以下の理由からまとめて「みてて」発話とし、参加観察と保育室に設置したビデオによる録画を併用して収集した事例をもとに考察を重ねている。

「みてて」は<みていてほしい>という対象にみている状態にあることを要請することばであり、「みて」は見る対象を指示することばである。同義ではないが、観察において

は、混同されていると考えられる場合やビデオで聞き取るとあいまいな場合もあり、本研究では厳密な区別を行わず、「みてて」発話の中にまとめてとらえた。

また、「みてて」ということばは一般的に「みていてほしい」という「見る」ことを要求したことばである。(中略)本研究では、幼児の発話として「みてて」とひらがなで表記し、標準語の見てもらうことを要求している意味で用いている。(福崎, 2002)

この一連の研究において、「みてて」発話には、保育者や友達の承認・賞賛や共感を求めたり、保育者に対する援助の要求や保育者を独占しようとする意図、あるいは友達に対する遊びの勧誘や遊具の交替、自己への激励など、様々な幼児の思いや主張・期待が込められていると考察されている(福崎, 2000)。そして、「みてて」発話を通して、入園以降の保育者との一対一の関係から他児とのかかわりを深めていく関係の構造や(福崎, 2001a)、一人の子どもの中でのその育ちの過程(福崎, 2001b)についても分析している。また、「みてて」発話の中には、保育者や参加観察者に呼びかけることを通して他の子どもに見てもらうことを意図している場合(福崎, 2002)があったり、参加観察者のありようや友達の特性を把握した上で、自分の思いを伝えるための道具的な役割を持っている場合があること(福崎, 2003)も指摘している。

以上のように、先行研究においては幼稚園児の「みてて」「みてて」という他者への呼びかけに焦点をあてて検討することを通して、その子どもの他者理解や他者との関係の育ちについても明らかにしている。

では、言葉による他者とのやりとりを始めたばかりの子どもたちはどのようにしてこのような呼びかけをするようになるのだろうか。このことについて考える際に参考になるのが、「ことばの前のことば」について検討したやまだ(1987)の「ものを見せる行動(指さし、提示、手渡し)の理論的ちがい」についての考察である。

やまだ(1987)は、私たちが他者に見てもらうように働きかける行動について、「指さし」のように「私はあなたと[ここ]で共に同じものを見たい」という「相手と『並ぶ関係』をつくる」場合と、「提示」のように「私の方、[ここ]にあるものに注目して」という「相手は私や私のものへの観客になる」場合の違いを整理し(表1、図1、図2参照)、次のように指摘している。

指さしでは私の一部(指や手)を相手に見せたいのではなく、外にある別のものを見せたいのである。

提示の基本型は(中略)[ここ]にあるもの[これ]を相手に見せる行動である。[これ]は私の領域内のものである。

提示はもともと自分自身に注目させる行動ではないが、ものを通じて私を見せる、さらに私そのものを見て欲しいという行動へと発展しやすい機構をもっている。相手は、私、あるいは私のもの、の観客として機能するのである。したがって提示は、人の注目を集めるために呼ぶ行動や、見せものの身振り(たとえば拍手やおじぎをして見せ、人に注目されたりほめられると喜ぶ行動)、さらにはずっと後に発達する見せびらかしや自慢や誇示などと機能的につながっていく。

他者が自分と同じ心理的場所に立つ「並ぶもの」なのか、他者は自分の「観客」なのか、[私]と[他者]との位置関

表1 ものを見せる行動(指さし、提示、手渡し)の理論的ちがい

	指さし (pointing)	提示 (showing)	手渡し (giving)
対象 (もの) との距離	離れている。 示すもの(手や指)と示されるもの(対象)とが分かれている。	近くにある。 示すものは対象そのものである。	近くにある。 示すものは対象そのものである。
対象 (もの) との関係	手で持たない。 対象は私の領域[ここ]より外にある。	手で持つ。 対象は私の領域[ここ]より内にある。	手で持つ。 対象は私の領域[ここ]より内にある。
相手へのはたらきかけ	「あれを見て。」 私はあなたと[ここ]で共に同じものを見たい。 相手と「並ぶ関係」(語りあう関係)をつくる。	「これを見て。」 私の方、[ここ]にあるものに注目して。 相手は私や私のものへの観客になる。	「これをあげる。」 [ここ]にあるもので一緒にあそびたい。 相手は私や私のものとのあそびに誘われる。
類縁関係にある他の行動	対象との距離に関して、ことばや身振り。	相手への働きかけに関して、呼ぶ行動や、見せものの身振りや、見せびらかし。	相手への働きかけに関して、やらせる行動や、やりとりゲーム。

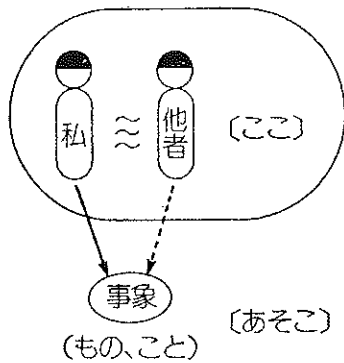


図1 並ぶ関係  
 ([ここ]で並んで同じものを見る関係)  
 「指さし」は基本的には並ぶ関係をつくる。私と他者は共に事象の観客となる。「あれを見て。」

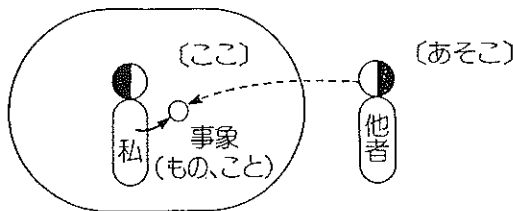


図2 提示 (showing) の関係  
 他者は私 (私のもの、私のやること) の観客となる。  
 「これを見て。」

係がちがっている。指さしや提示の段階では、まだこの方向性の相違はささやかなもので、乳児自身に意識されたものでもない。

人は自分と「私たち」という「並ぶ関係」をつくるのか、「私」を見る「観客」として機能するのの亀裂は、1歳、2歳代において、「私」という自己の意識がめばえるころには、はっきりしてくるであろう。(やまだ, 1987)

このやまだ (1987) の指摘をふまえ、本研究では「[私]という自己の意識がめばえるころ」の子どもたちを対象とし、他者への「みて」「みてて」という呼びかけについて、他者が「『私』を見る『観客』として機能する」場合と考えられる「提示」のための呼びかけに焦点をあてて検討したいと考えた。

そこで、本研究では保育所1歳児クラス、2歳児クラスの子どもたちを対象とし、どのような「提示」のための呼びかけ(以下、「提示的呼びかけ」とする)をするのか事例を収集して検討していきたい。そして、そこに子どもの「[私]という自己の意識」のめばえがどのように表れているのかについても検討していきたい。

## 2 方法

### 1) 対象児

北九州市内のA保育所の2002年度1歳児クラス、2003年度2歳児クラスに事例収集の期間中に入退所せず在籍した子どものうち、事例収集開始時に言葉が出ていなかった2名を除く19名(男児11名、女児8名)。この保育所では未満児は0歳児、1歳児、2歳児各1クラスのため、1歳児クラスから2歳児クラスへの移行時にはクラス替えはなかったが、保育室は同じ2階の隣の部屋に移動した。また、4名の担任保育者のうち、3名が入れ替わった。

### 2) 事例収集の期間

- ・2002年度1歳児クラス  
2003年1～3月 計11日
- ・2003年度2歳児クラス  
2003年4～6月 計11日

一日の園生活の流れや一人ひとりの子どもについて予め理解しておくため、事例収集開始前の2002年11～12月にも計8日の参加観察を行なった。

### 3) 事例収集の方法

週1日の割合で保育に参加し、子どもたちとかかわりながらの参加観察を行なった。保育中に子どもが他者に「みて」「みてて」と呼びかけた場面をメモ帳に簡単に記録し、保育後にフィールドノートにまとめた。また、午睡の時間等の保育の合間に、担任保育者からその場面について説明してもらったこと、子どもたちの様子や保育の流れについて聞いたことや話し合ったこともフィールドノートにまとめ、考察の参考とした。

先行研究では好きな遊びの時間(9:00～11:00)を中心に参加観察をしているが、本研究では園生活の流れの中で、また保育者や友達を含むさまざまな周りの環境とのかかわりの中でどのような提示的呼びかけが見られるのかを検討したいと考え、一日の参加観察を行なった。時間帯は、原則として9:00～17:00である(そのうち、午睡のおおよその時間帯は12:30～15:00)。

また、先行研究ではビデオ録画も併用しているが、本研究では用いなかった。筆者が保育者の一人として子どもたちとかかわりながら行なう参加観察では、収集する事例も筆者とかかわりのあった子どもの事例がより多くなり、観察できる範囲もより少なくなるであろうが、子どもたちには時々クラスに入る保

育者の一人として違和感をもたずに受け入れてもらいやすいし、考察の際にも筆者自身が保育者の一人として子どもとかかわる中で体験したことを重視したいと考えたためである。また、複数担任での保育である上に、勤務のローテーションの中で、担任以外の保育者も頻繁に保育に参加するため、ビデオ設置によって保育者が必要以上に意識して動きにくい状況になることも避けたかったためである。

#### 4) 事例のまとめ方

フィールドノートから提示的呼びかけの記録を取り出して、事例としてまとめた。その際には、ある子どもの呼びかけに触発されて他の子どもも呼びかけた場合や、ある子どもが複数の相手へ呼びかけた場合も一つの事例の中にまとめた。なお、対象とした子どもたちの場合、「くみていてほしい」という対象にみている状態にあることを要請することば（福崎，2002）としては「みよって」「みとって」（この地域の方言）と呼びかけることが多かったが、「みてて」と同じ意味ととらえた。

保育者は1歳児クラス担任4名をa先生、b先生、c先生、d先生、2歳児クラス担任4名をa先生、e先生、f先生、g先生と表記した。（a先生は0歳児クラスから2歳児クラスまで担任であり、b先生は0歳児クラスから1歳児クラスまで担任であった。）

### 3 結果と考察

1歳児クラス1～3月の参加観察において26事例、2歳児クラス4～6月の参加観察において132事例の提示的呼びかけの事例を収集した。

#### 1) 各対象児における事例数

一人ひとりの子どもにおける事例数を表2にまとめた。表2からわかるように、クラスの中で一番月齢の高い子どもA男、B子、C男の事例数が多い等、収集された事例数にはかなりの個人差があった。

事例数は一人ひとりの子どもと筆者とのかかわりの多さにも左右されていると考えられるが、同じ保育室内で一日の大半を過ごしている中での参加観察であるため、実際の提示的呼びかけの個人差はかなり反映されているのではないかと思われる。

#### 2) 提示的呼びかけの内容

先行研究でも指摘しているように、対象とした子

表2 対象児に見られた提示的呼びかけの事例数

事例収集 名前 (誕生日)	1歳児クラス (1～3月)	2歳児クラス (4～6月)	計
A男 (4月)	4	28	32
B子 (4月)	3 (1)	14	17 (1)
C男 (4月)	5	14	19
D男 (5月)	2 (1)	8	10 (1)
E男 (6月)	0 (1)	0	0 (1)
F男 (6月)	0	2	2
G男 (6月)	0	0	0
H男 (7月)	2 (1)	7 (2)	9 (3)
I子 (8月)	1	1	2
J子 (9月)	3	4	7
K男 (9月)	0	4	4
L男 (10月)	1	4	5
M子 (10月)	2	11	13
N子 (10月)	1	0	1
O男 (11月)	0	13	13
P子 (11月)	0	2	2
Q子 (2月)	0	11	11
R子 (2月)	0	1	1
S子 (3月)	2	8	10
計	26 (4)	132 (2)	158 (6)

注) 表の( )内の数は他の子どもの呼びかけに触発されて生じたと判断された事例数を別に記したもの。

どもたちの姿からも、提示的呼びかけによって単にモノや行為を見せることだけを意図しているわけではなく、そこに様々な思いが込められていることが考察された。また、その一方で、見せようとするモノや行為には子どもたちの中に共通する部分もあった。そこで、まず見せようとしたと考えられたモノや行為を提示的呼びかけの内容として整理した上で、具体的な事例によってそこに込められた子どもたちの思いについても考察していくことにしたい。

#### (1) 1歳児クラスで見られた提示的呼びかけの内容

1歳児クラス1～3月で見られた提示的呼びかけの26事例のうち、判断がつかかねる1事例を除いた25事例の内容について検討したところ、少なくとも以下の7つの内容に整理できるのではないかと考えられた。そして、そのいずれもが、後述するように2歳児クラス4～6月になっても見られた。

①身に着けたモノ (1事例)

【事例1】 2003/2/15 クラスのみんなでリズム遊びをした後「輪になって座れるかな」とc先生が言い、他の保育者も一緒に入りながら子どもたちはなんとか輪になって床に座る。その時、C男はそばと一緒に座っていたb先生に笑顔で「みて、せんせい」と言い、グレーのズボンの腰のところに入っているヒモを見せる。(オレンジの蛍光塗料で着色してある。新しいズボンのようだった。)

保育室では子どもたちの持ち物は棚やロッカーに整理され、他の子どもの持ち物と区別されているが、その中でも衣服は自分だけが身に着けるモノだけに、「自分のモノ」という思いが強く感じられた。

特に【事例1】でC男がb先生に「みて、せんせい」と言ったズボンは新しく買ってもらったモノらしく、光るオレンジ色のヒモも気に入っているようだった。そのうれしさを、みんなで肩を寄せ合って座る場面で自分のそばにいたb先生に伝えたくなくて、このように呼びかけたように思われた。

②気に入ったモノ (1事例)

【事例2】 2003/1/15 午後のおやつ後の遊び

絵本棚の前のカーペットに座り、私とJ子が『どうくんのさんぼ』を読んでいると、S子がやってきて座り、その絵本を横からとって自分で見始める。J子は私の顔をじっと見つめる。私は迷いながらも、ニコニコして絵本を手にしているS子に返してもらうことは難しそうだと判断し、J子に「別の本読もうか」と話して、J子が選んできた絵本と一緒に読み始める。その横で、S子は『どうくんのさんぼ』を持ち上げて、「みて! どうさん!」と私に言う。

この頃、子どもたちは保育者と一対一で、あるいは他の子どもたちと保育者を取り囲んで絵本を読んでもらうことを好んでいた。そして、保育者に読んでもらって楽しんだ後には、その絵本を抱きしめて他の子どもに貸そうとしないという姿も見られ、大事な「自分のモノ」と思っていることが感じられた。

S子も筆者と一緒に絵本を見る事が多く、絵本の絵を指さしてうれしそうに「みて!」と叫ぶことも多かった。しかし、このように絵本を持ち上げて見せながら「みて!」と呼びかける姿を見たのは、この時が初めてであった。そして、この時のS子の呼びかけには、単に気に入ったモノを見せたいという思いだけでなく、J子ではなく自分と絵本を見たいという思いも込められていることが感じられた。

③作ったモノ・作っているモノ (8事例)

【事例3】 2003/2/15 午前のおやつ後の遊び

B子が「せんせい、みてー」と四角い土台の縁側にきれいに青と赤の「プチプチ」(土台にさし込んでいくモノ)をさしたのを見せる。私が「青と赤できれいね」と言うと、他の保育者にも見せに行く。そして、そのままさし続けるかと思っていると、ロッカーの上に置いてほしいという。それで、「かざるの?」と確認しながらロッカーの上に下からもよく見えるように置いてみせると、B子は満足そうに笑う。

パズルをしている途中で呼びかけた2事例以外は、ブロック、粘土、砂場等で作ったモノが出来上がった時にこのように呼びかけていた。自分が作って出来上がったモノに対しては、①②と同様に思い入れが強い大事な「自分のモノ」と感じているように思われた。ブロックで作ったモノは他の子どもに触らせなかったり、午睡や食事の時間になってもロッカーの上に置いてほしいと頼む姿も見られた。このように作ったモノを見せる時には、そのモノを「自分が作った」という喜び・満足感を伝えたいという思いだけではなく、「このモノを作った自分」を見てもらいたいという思いも感じられることがあった。

このような呼びかけは、友達に対しても2事例あった。

④モノを操作すること (5事例)

【事例4】 2003/1/22 午前の遊び (2階ベランダ)

J子はベランダに出してある滑り台の階段を登り、滑り台の下のところから少し離れた場所にいた私に「みとってよ!」「みとって!」と叫び、私が見ているのを確認してから滑り降りる。その後からすぐB子も滑り台の階段を登り、私に「みて」と言ってから滑り降りる。

このように固定遊具で遊んでいる時の呼びかけが3事例あった。「みとってよ」と呼びかけ、見守ってもらうことを支えとして挑戦しようとする気持ち、「こんなことができる自分」を見てもらいたいという思いが感じられ、いずれも保育者に対しての呼びかけであった。

その他に、道具を用いた遊びの中で次のような呼びかけが見られた。

【事例5】 2003/1/15 午睡後の遊び

保育者がおやつ準備をし始め、子どもたちは手を洗い、テーブルにつき始めていたが、L男がパズルを続けていたので私がそばについて見ていた時のこと。

B子が自分のロッカーから小枝を取り出して持ってくる。そして、「L男くん、みとってね、ほら」と言って小枝を親指と人差し指で持ち、指をずらしながら小枝をクリクリと回転させる。L男は黙って見ている。

B子は「せんせい、みててね」と私の方にも見せて回転させる。感心した私が「わあ、すごいねえ」と言うと、B子は得意気に笑う。

【事例6】2003/1/22 朝の遊び

ルーピング（ワイヤーに通った球を動かしていく遊具）をJ子とK男が一緒に使って遊んでいた時のこと。J子が動かしていた球が遊具の反対側にいるK男のところへ移動していくと、J子は「みて、K男くんとこきた（K男の方へ移動したという意味）」と私に言う。

どちらもモノを操作する中での呼びかけであるが、

【事例5】のB子はわざわざロッカーの中にある小枝を取り出して見せており、「こんなことができる自分」を見てもらうことを最初から意識した上での行為であることが「みとってね」という言葉からもわかる。そして、ここではまず親しい友達であるL男に呼びかけている。それに対して【事例6】のJ子は、自分がモノを操作した結果への驚きから、それに注目してほしくて思わず「みて」と呼びかけたように感じられた。

⑤面白いこと（6事例）

【事例7】2003/3/5 給食

L男は食事中に一人でイナイナイバーをして、しばらくニコニコ笑っていた後に、テーブルの向かい側に座っていたa先生に「せんせい、みとって」と言ってイナイナイバーをしてみせる。A先生は何も言わずにそれを見つめる（「そんなことしないの」等は言わないが、そのことを認める言葉もかけない）。

その様子をじっと見ていた同じテーブルのE男も、「せんせい、みとって」とA先生にイナイナイバーをして見せる。そして、そのすぐ後に同じくその様子をじっと見ていた同じテーブルのD男も「せんせい、みとって」とa先生にイナイナイバーをしてみせる。

【事例8】2003/3/20 午前のおやつ

M子は牛乳のコップにおやつを食べて空になった皿を裏返してふたのようにしてかぶせ、それを指さして「B子ちゃん、みてー！」とB子に呼びかける。B子はなかなか気づかず、M子は何度も大声で呼ぶ。

【事例7】のL男はイナイナイバーを一人で楽しんだ後に、a先生に自分のしていることを見てもらおうと呼びかけたことが「みとって」という言葉からわかる。一方、【事例8】のM子はコップにお皿をかぶせてみると面白く感じたらしく、B子にも見てもらいたくて「みてー」と呼びかけている。

このようにその子どもが「面白い」と感じるころがあった時に呼びかける事例が、遊びの中で3事例、食事の中で3事例あった。「こんな面白いことを考えた自分」を見てほしいという思いも感じられたが、

中には【事例7】、【事例8】のように、保育者からするとそのまま見ていてよいのか迷う場合もあった。

「その場で本来することではないことをしている自分」を見てもらうことにも楽しさがあるように思われる。

このような呼びかけは、保育者に対しても友達に対しても見られた。

⑥フリをすること（1事例）

【事例9】2003/3/31 午前の遊び（2階ベランダ）

D男が私に「せんせい、みとってよ」と言い、何か叫びながら遠くの方まで走っていく。そして、笑顔で急いで戻ってきて、また「むしだー！」と叫びながら走っていく。（1回目も「むしだー！」と言っていたらしい。）

ここで、D男は「虫に驚いて逃げていく」というフリをしていたようで、今までの何らかの経験からイメージしているようであった。「フリをしている自分」を見てもらうことで、なりきることの楽しさがより大きくなるようで、「みとってよ」と呼びかけてから走り出していた。

そのような思いに加え、ここでのD男の呼びかけには、一緒に遊ぶことが少なかった筆者を自分とのやりとりを引き込みたいという思いも感じられた。

⑦飲食すること（3事例）

【事例10】2003/1/8 給食

A男が空になった自分の皿を手にとり、「H男くん、みて」と笑顔で皿の中を見せる。すると、H男も笑い、自分も空になっている皿を手にとり、「みて」と同じように皿の中を見せる。

この事例では、友達同士で互いに呼びかけ、食の喜びを分かち合っているように思えた。他の2事例は保育者に対して呼びかけた事例であり、自分が食べたクッキーのあとを見せて笑い、「みて、こわれた」と言ったり、「せんせい、みてて」と呼びかけて見守ってもらいながら給食の最後にお茶を飲みほすという事例であった。

このような食事場面での呼びかけには、保育者が価値を置いていること（おいしく全部食べる、飲む等）を子ども自身も意識して呼びかけているのではないかということも感じられた。もっとも、それは他の場面での提示的呼びかけにも表れている可能性があり、特に食事の場面にはそれが表れやすいと考えることもできるだろう。

(2) 2歳児クラスで見られた提示的呼びかけの内容

2歳児クラス4～6月で見られた提示的呼びかけ132事例のうち判断がつきかねる2事例を除いた130事例について、新たに5つの内容を整理できるのではないかと考えられた。また、事例数が多い子どもたちの中には、その子どもに特徴的と考えられる呼びかけも見られた。

以下、1歳児クラスにおいて見られた内容に変化が見られた部分、新たに現れた内容、またその子どもに特徴的と考えられた内容を中心に述べていく。

①身に着けたモノ (5事例)

気に入った服を見せようという呼びかける姿が、2歳児クラスにおいても、遊びの中で1事例、着替えの時に4事例あった。もっとも、遊びの中での【事例11】の場合には、自分とのやりとりを引き込みたという思いの方が強く感じられた。

【事例11】2003/4/30 朝の遊び

朝、私が保育室に入ると、子どもたちが話しかけてくる。S子はままごとコーナーでテーブルの上に食べ物をのせたお皿を並べていたが、私がお隣のタクミコーナーに座って子どもたちの様子を見ているところにやってくる。お鍋を見せたりした後、自分のTシャツを指さして「みて！」と言う。Tシャツの胸のキャラクターのバッチリした目を指さして「おめめ！」とも言う。

②気に入ったモノ (10事例)

遊びの中で1歳児クラスでも見られた絵本 (6事例) 以外に、新しい遊具 (1事例)、指人形 (1事例) を手にして「みて」と呼びかける姿が見られた他、おやつ時間にカラフルなおやつを手にとって (1事例)、また、クラスのみんなど新聞紙で遊んでいる時に人物が掲載された新聞広告の切れ端 (1事例) を手にとって、「みて」と笑顔で呼びかける姿があった。

絵本の1事例 (持ち歩きながら誰にということではなく呼びかける)、新聞広告の切れ端 (友達に呼びかける) 以外は保育者 (6事例) や迎えに来た友達の母親 (2事例) への呼びかけであった。

【事例12】2003/6/4 午後の遊び

B子の母親が迎えに来て、遊んでいる子どもたちの横でa先生と座って話している。そこに、C男がペンギンの写真絵本を持っていき、何度も「みて」と呼びかける。B子の母親が気づくと、C男はペンギンの写真を見せながら「B子ちゃんとお母さん」と笑顔で言う。(その前にB子、C男、私でこの絵本を見ていた時、C男は「これ、B子ちゃん」などとペンギンの写真を指人形を指さしながら話していた。)

【事例13】2003/6/4 午後の遊び

S子の母親が迎えに来て、ロッカーのところで帰り支度をしているところに、Q男がドキンちゃんの指人形を持って駆け寄り、笑顔で差し出して「みて」と言う。

【事例12】のC男はこの頃、作ったモノにも「～ちゃんとお母さん」というイメージをのせて遊び、保育者や友達に呼びかけてうれしそうにそのイメージを伝える姿が見られた。ここでも、絵本の中のペンギンを「B子ちゃん」「お母さん」とイメージしていた楽しさをB子の母親にも伝えたいと思って呼びかけたようだった。一方、【事例13】のQ男の場合は、気に入ったモノを見せることによってS子の母親とかかわりを持ちたいという思いが強く感じられた。

これらの場合、単に気に入ったモノを見せたくて呼びかけているというよりは、そのモノをもとに楽しむことを気に入っており、そのモノを見せることでその楽しさを伝えたい、その楽しさを味わうやりとりを引き込みたいという思いから呼びかけていると考えることもできるだろう。

③見つけたモノ (7事例)

【事例14】2003/4/9 朝の遊び (2階ベランダ)

ベランダ横の桜の花びらがほとんど散り、ベランダにたくさん落ちていた。M子はその花びらを拾い、私に差し出して「みて」と言う。

春になり、戸外で遊ぶ時間が増えたこと、花が咲いたり虫が出てきたことで、探索的な遊びを楽しむ姿が増えた。そして、見つけた自然物を手にとって、また、容器に入れたりして呼びかけて見せる姿が新たに見られた。この場合、「並ぶ」関係で一緒に見てもらおうとしているとも言えそうだが、「自分が見つけた」という喜びや驚きをそのモノを見せることで伝えたいという思いが強く感じられるため、提示的呼びかけであると考えることができる。

このような呼びかけは、友達に対しても保育者に対しても見られた。

④作ったモノ・作っているモノ (33事例)

ブロックで車や武器を作ることに熱中したり、保育者が作った場に集まって絵を描いたり、モノを作る楽しさを味わう姿が多く見られるようになり、作ったモノを見せようという呼びかけることがさらに増えた。そして、【事例15】のように作っているプロセスの中で呼びかけることも7事例あった。そのプロセスの中で生まれた楽しさ、喜びを伝えたい、

「こんなモノを作っている自分」を見てほしいという思いが感じられた。

【事例15】2003/5/7 午前の遊び

テーブルの周りに数人の子どもが座り、保育者に紙をもらってペンで絵を描いている。そこにP子が来て「かく」と言って座る。「ほら、みて、ほら」とペンで絵を描きながら、そばにいる私に言う。その後、絵にペンで点々を描きながら「みて」「どろどろおぼけ」と言う。

また、ブロックで作った車やつなげた汽車で遊ぶことを楽しんでいる際の呼びかけも2事例あった。

このような呼びかけは、友達に対しては33事例中A男とC男の2事例のみであった。

⑤モノを操作すること(20事例)

子ども自身かなりモノを使いこなせるようになったこともあり、保育者によって提案されたモノ(広告紙で作った棒に紙テープをつけたモノ、風車)やフープやボールで遊ぶ中で、自分なりに工夫して遊ぶ面白さ、喜びを味わい、そのように「モノを使いこなせる自分」を見てもらいたい、モノを操作することの楽しさ、面白さを伝えたいという思いから呼びかけていると感じられる事例も増えた。

【事例16】2003/4/30 午前の遊び(園庭)

A男は園庭の少し高くなっている山の上に立ち、「せんせい、みてて」とa先生に言ってからテープをつけた棒を持って駆け下りる。

【事例17】2003/5/21 午後の遊び(2階ベランダ)

L男はボールをバウンドさせてとろうとすることを繰り返している時、ボールを追いかけながら私の方を見て、「みてー!」と叫ぶ。

私が「みてるよー」と声をかけると、L男は真剣な顔でバウンドさせたボールをとろうとする。

【事例17】のL男はボールをバウンドさせてとろうとすることを繰り返す中で「ボールをとろうとする自分」を見てもらいたいという思いが生まれたようで、「みてー!」と呼びかけている。一方、【事例16】のA男はテープが風になびいたり棒を振るとヒラヒラ揺れることを楽しんだ後、高い所から走り降りるところをa先生に見てもらおうことを意識して呼びかけたことが「みてて」という言葉からわかる。

車に人形のブロックを乗せ、【事例18】のように自分のイメージを持ってその車を走らせているときに呼びかけることも3事例あった。ここでのD男も、車を走らせることを一人で楽しんでいた後に、筆者に見せることを意識して「みよって」と言い、さらにいろんな走らせ方をして見せていた。

【事例18】2003/6/11 給食後の遊び

D男は車にブロックの人形を乗せ、ままごとコーナーの棚の上を走らせている。そばにいた私に「みよって」と言うので、「いろいろな道を行ってるの?」と聞いてみる。すると、「みよって」と言い、ままごとコーナーの流し台の周りを走らせて見せた後、さらに「みよって」と言って車を動かし、何度も流し台のシンク部分の上を飛び越えたり戻ったりして見せる。

このような呼びかけは、友達に対してはA男とB子の2事例が見られた。

⑥面白いこと(23事例)

「面白いこと」を見出して呼びかけることも増え、中には【事例19】のように、保育者に呼びかけて「注意されるかもしれないことをしている自分」を見せようとしていると思われる姿もあった。また、午睡の時には【事例20】、【事例21】のように退屈を持って余して楽しいことを探していたり、なんとか寝てもらうことにとらわれがちな保育者とやりとりを楽しみたいという思いから呼びかけていると感じられる姿もあった。

【事例19】2003/5/7 着替え

A男が「みて」と呼ぶので見てみると、絵本棚(絵本の表紙が見えるように階段状になっている)に登り、私の方を見て笑っている。

【事例20】2003/6/11 午睡

ほとんどの子どもが寝てしまったが、Q男はなかなか寝つかない。Q男の側にいたe先生がQ男のそばを離れると、Q男は同じように寝つかないA男のそばにいた私のところに来て、後ろから肩に覆いかぶさる。

それで、Q男の布団のところへ一緒に行く。Q男は掛け布団用のバスタオルを腕にグルグル巻き、私に差し出して「みて」と言う。そして「なくなった」と言った後、バスタオルから腕を出してニヤッと笑う。

【事例21】2003/6/18 午睡

なかなか寝付かないO男の体を枕元に私がトントン叩いていると、O男は寝たまま両足を上げて両手でつかみ、「みてー」と言う。

このような呼びかけは、友達に対しても3事例、保育者と友達に対しても2事例見られた。

⑦フリをすること(15事例)

「フリをすること」も増えたが、このうちの7事例は事例数が一番多いA男の事例であった。A男は大好きなバイキンマンやアバレンジャー等のキャラクターになりきるだけでなく、次のように保育者に呼びかけ、見守ってもらうことで「自分のイメージで行なっていること」をより楽しんでいるように思



われる姿もあった。

【事例22】2003/5/7 午後の遊び

A男は私に「ピッピーちゃん」をとりたいと言い、「だっこ」と言う。私が抱っこしてロッカーの上のぬいぐるみのところへ行くと、トリのぬいぐるみ（「ピッピーちゃん」と他の子どもも呼んでいるらしい）をとり、テーブルの方へ行く。そして、テーブルの上にぬいぐるみをのせ、「せんせい、みよって。みよってよ」と言い、持っていたブロックでぬいぐるみをしばらく触った後、「もう大丈夫よ」と言う。（「ピッピーちゃんに手当てをしている」というイメージらしい）

⑧飲食すること（3事例）

「飲食すること」の事例数だけは、1歳児クラスと変わらなかった。また、その中でB子の【事例23】は飲食することというよりも、保育者にそばで自分のことをずっと見てほしいという思いからの呼びかけと考えられた。食事のときに保育者にそばに来てもらいたがることは多くの子どもに見られる姿であるが、この日のB子は朝から気持ちの立て直しがうまくいかない状態にあるため、このように呼びかけていると感じられた。そして、a先生もB子の気持ちを受けとめ、B子の呼びかけに応えながらずっと見守っていた。

【事例23】2003/5/29 給食

B子はa先生に「せんせい、みよって」と言い、パンをちぎる。a先生に「ちぎって\*\*レディみたい。レストランに行けそう」と言われると、笑顔になる。B子はその後も、「みよって」と言ってパンをパクッと食べて見せたりする。そして、他の子どもの周りにも行って食事の援助をしているa先生に「せんせい、みえる?」「せんせい、みて」と何度も呼びかけてお椀を手で持って食べる姿を見せたりする。

a先生はB子のテーブルを離れる時には、B子の頭をやさしく撫で、他のテーブルの子どものところへ移動する。  
(注:「\*\*」は会話の中で聞き取れなかった部分)

⑨身の回りのことが自分でできること（6事例）

前述のように1歳児クラスにおいても、保育者の評価を意識した上での呼びかけではないかと思われる事例があったが、2歳児クラスではそれがはっきりとわかる事例が見られた。それは「身の回りのことがきちんとできる自分」を保育者に見てもらおうと呼びかける事例であり、A男に2事例（きちんと手を洗う、きちんと座る）、D男（口ふきタオルをきれいに丸める）とM子（一人で着替える）に1事例見られた。

また、B子の2事例では、一人で立ったまま靴が履けることを保育者だけでなく、友達（L男、O男）にも呼びかけ見てもらおうとしていた。

⑩自分の身に起きたこと（2事例）

自分の身に起きたことに共感してもらいたい、見てもらいたいという思いが窺える保育者への呼びかけも新たに見られた。

【事例24】2003/5/28 午後の遊び

C男がa先生のところにやって来て、「せんせい、みて。こんななった」と言って自分の手を見せる。

a先生は「どうしたの?」「お花触ったの?」と聞くと、C男は「うん」と言う。

(ままごとコーナーのテーブルに飾っていた花に触り、手に花粉がついてしまったため、a先生に見せに来たらしい)

⑪友達とかかわっていること（2事例）

「友達とかかわっている自分」を見てほしいという思いが感じられる保育者への呼びかけも、新たに見られた。

【事例25】2003/6/11 給食後の遊びと読み聞かせ

B子とL男が私の膝の上に座ろうとしてケンカになる。B子は手にしていたブロックを長くつなげたモノでL男を叩き、L男は大声で泣く。そして、L男もB子のことを叩き、B子も大声で泣き始める。ブロックで作ったモノもバラバラになってしまう。

その後、B子のところに、L男がブロックをつなげたモノを持ってくる。B子も笑顔になり、始まった読み聞かせには参加せず、保育室の隅で二人で楽しそうに話している。

その様子にほっとして、読み聞かせの場の子どもの後ろに座って一緒に絵本を見ていた私に、B子が「みてー、L男くんが!」と呼びかける。B子の方を見てみると、驚いたようなうれしそうな何ともいえない表情で私を見ており、B子はブロックを置いたままごととテーブルの横に座っており、L男がまたそこにブロックを持ってきていた。

前述のように、B子はL男に対して1歳児クラスの時から特に親しみをもち、提示的な呼びかけが見られていた。また、気持ちの立て直しができずにボーッとしていたり、すぐに泣いてしまうこともあった。ここでは、L男と叩き合いのケンカになってしまった後、ずっと悲しい表情をしていたのだが、L男がブロックをつなげて持ってきてくれたことで、晴れ晴れとした笑顔になっていた。

ここでのB子の呼びかけは、筆者に「並ぶ関係」で自分にブロックを持ってきてくれたL男のことを一緒に見てほしいという思いからの呼びかけととらえることもできそうだが、ブロックを持ってきたL男とB子が一緒にいるときに筆者に呼びかけたことをふまえても、「L男と仲直りした自分」を、その経緯を見ていた筆者にも見てもらいたい、その喜びを伝えたいという思いからの提示的呼びかけであると考えることができる。

表3 各場面における事例数

場 面 分 類	遊 び		食 事		着 替 え		午 睡		ク ラ ス の 時 間		計	
	1~3月	4~6月	1~3月	4~6月	1~3月	4~6月	1~3月	4~6月	1~3月	4~6月	1~3月	4~6月
身につけたモノ		1				4			1		1	5
気に入ったモノ	1	8		1						1	1	10
見つけたモノ		7										7
作ったモノ・作っているモノ	8	28						1		4	8	33
モノを操作すること	5	20									5	20
面白いこと	3	12	3	4		3		3		1	6	23
フリをすること	1	12		1		1				1	1	15
飲食すること			3	3							3	3
身の回りのことが自分でできること		2		3		1						6
自分の身に起きたこと		1								1		2
友達とかかわっていること		1								1		2
報告したいこと		4										4
判断がつかかねる事例		1			1			1			1	2
計	18	97	6	13	1	9	0	5	1	9	26	132

⑫報告したいこと（4事例）

報告したいことがあり（落としものがあること等）、保育者に呼びかけるという姿も新たに見られた。

【事例26】2003/5/7 午前の遊び

絵本を見ていたK男がトイレに行っている間、A男はK男の見ていた絵本を手にとる。そして、絵本の裏表紙が汚れているのに気づき、私に見せながら「みてー」「よごれとー」と言う。

この場合には、「自分のモノ」「自分のこと」という思いは感じられなかった。

3) 一日の生活の流れの中での検討

一日の生活を大きく「遊び」、「食事」、「着替え」、「午睡」、「クラスの時間」と分け、それぞれの場面で見られた事例数を表3にまとめた。

（読み聞かせ、お話、リズム遊び等を保育者と子どもたちで楽しむ時間を「クラスの時間」としたが、その中では複数いる保育者や友達と一対一のやりとりをしている子どもがいる場合もある。）

遊びの場面で事例数が多いのは、子どもたちの生活の中で多くの部分を占めるのが遊びであるため当然であるが、食事や着替えの時間でも提示的呼びかけが見られ、その事例数はさらに2歳児クラスになって増えている。また、2歳児クラスでは午睡前の時にも提示的呼びかけが見られた。食事の時間はテーブルを囲んで友達や保育者と向き合う場面である。

また、着替えの時には保育者と一対一の関係を持つことが多いし、眠りにつくまでの間も保育者や並んで寝ている友達と一対一の関係を持つことが多い。そのため、提示的呼びかけも起こりやすいと考えられる。

クラスの時間も短い時間であるが、やはり2歳児クラスでは事例数が増えている。ここでは、保育者に読んでもらっている絵本の絵を指さしながらの呼びかけ、つまり、一緒に見ている周りの子どもや保育者と「並ぶ関係」になる「指さし」的な呼びかけもよく見られたが、提示的呼びかけは、クラスのみennaに対してではなく、保育者や友達との一対一の関係の中で見られた。

4) S子の提示的呼びかけの変化に「[私]という自己の意識のめばえ」を見る

最後に、これまでの考察をふまえながら、S子（事例収集開始時1歳10ヶ月）という一人の子どもの提示的呼びかけの内容の変化を追うことを通して、「[私]という自己の意識のめばえ」がどのように表れているのかを検討したい。S子の事例を取り上げるのは、筆者がこの事例収集の間にクラスの中でよくかかわった子どもであることに加え、事例数は多くはないが、S子の提示的呼びかけの内容の変化が、やまだ（1987）のいう「[私]という自己の意識のめばえ」を窺うことができる興味深いものであったためである。

(1) 1歳児クラスで観察されたS子の提示的呼びかけ

前述のように、事例収集開始の頃からS子は筆者と絵本を見ながら、絵本の絵を指さして「みて」と言う他に、様々なモノを指さして「みて」と呼びかけることが多かった。しかし、提示的な呼びかけと考えられる姿が見られたのは、絵本を手にとり、「みて！ ぞうさん！」と呼びかけた時が初めてであった（【事例2】(2003/1/15)参照）。

次に見られたS子の提示的呼びかけは、この時期に一番多かった「作ったモノ」を見せる際の呼びかけであった。

【事例27】 2003/3/5 午後の遊び

1つのテーブルの周りに、A男、H男、J子、P子、S子らが座り、粘土で遊んでいた時のこと。S子は「みてー、へび」と粘土を細長くしたモノを差し出して周りの子どもたちに見せる。

(2) 2歳児クラスで観察されたS子の提示的呼びかけ

2歳児クラスになり、自分が「身に着けたモノ」を「みて」という姿（【事例11】2003/4/30参照）が見られた。そして、同じ日に提示的呼びかけの内容が「自分のしていること」である姿（「モノを操作すること」）も初めて見られた。

【事例28】 2003/4/30 午前の遊び(園庭)

S子は園庭にある小さな山の上に立ち、テープのついた棒を振りながら「みてみてー」と担任の代わりにクラスに入っていた保育者に呼びかける。

【事例29】 2003/4/30 午前の遊び(園庭)

園庭で棒を振ってしばらく遊んだ後、S子は「みてー」と私に言い、私の方に向けて笑顔で棒を勢いよく振る。棒についていたテープが私にあたる。

この日S子は保育者や友達と【事例28】のように園庭で広告紙の棒を振ったり走り回ったりしてテープが揺れることを楽しんでた（【事例16】参照）。棒を振って園庭の大きな鯉のぼりの尻尾にテープをあてて面白いがる子もいて、S子もそれを見ていろいろと試していたのではないと思われる。そして、【事例29】では筆者に「みてー」と言った直後に棒を振っており、テープを筆者にあてることを意識した上でこの呼びかけであったと考えられる。

この頃のS子は筆者と遊ぶことを好む一方で、食事中に筆者がそばにいとわざとふざけて見せるようにもなっており、筆者を困らせようとしていたとも考えられる。また、このように働きかけることで

筆者とのやりとりを楽しもうとしたとも考えられる。

さらに、この日には「友達とかかわっている自分」を見てもらうことを意図した呼びかけも初めて見られた。

【事例30】 2003/4/30 午後の遊び

N子、S子、I子が手をつなぎ（S子が真ん中）、3人で手をつないで笑顔で保育室の中を歩いて回っている。時々走っていることもある。a先生が走るとあぶないよと声をかけるが、ずっと歩き回っている。そして、3人で手をつないだまま転んでしまう。

しかし、起き上がってまた笑顔で3人で手をつないで保育室の中を歩き回っている。その時、S子は「みて！」と私たちに呼びかける。

【事例30】はS子が「自分を見てほしい」と意識して呼びかけたとはっきりと感じとれた事例であった。自分が真ん中になり、N子とI子と手をつないで3人で保育室内を歩いて回ることがとても楽しかったようで、かなりの時間こうして歩いて回っていた。その中で「友達と手をつないで歩いている自分」を見てほしいという思いが生まれて呼びかけたと考えられる。

その後、「面白いこと」を見てもらうよう呼びかける姿も初めて見られた。

【事例31】 2003/5/7 着替え

着替えを入れた籠があるロッカーの前で、S子はビニール袋（着替えや口ふきタオル等の洗濯物を入れる袋）を顔に押し当て、そばにいたM子、B子、私に笑顔で「みて！」と言う。

（普段はスーパーの袋等を家庭から持ってくるのだが、この日は忘れたのか、透明のビニール袋を保育者が用意したようだった。）

【事例32】 2003/6/25 午後の遊び

S子の母親が迎えに来て帰りの支度をしていた時のこと。S子はタオルかけのところへ行って自分のタオルをとりに行く。（タオルかけのタオルも他の洗濯物と一緒に持って帰ることになっている）

タオルを手にとると、S子は腕を大きく動かしてそのタオルを振って笑顔で歩きながら、「みてー！」と言う。

【事例31】では普段とは違い、袋が透明であることを面白く感じて顔にあててみたようだった。【事例32】でも、普段通りにタオルをとって母親のところへ持って行く際に、タオルを大きく振ってみると面白く感じたようだった。いずれも、そのように「面白いことをしている自分」を見てもらうことを意識して呼びかけたと考えられる。

また、次のように「フリをすること」を見てもらうように呼びかける姿も初めて見られた。「眠った

フリをする自分」を見てもらうことを意図して人形のベッドに登り、筆者に呼びかけたと考えられる。

【事例33】2003/5/28 午後の遊び

S子は「せんせい、みて」と私に言い、ままごとコーナーにある人形のベッドの上に登ってひざまづいて座り、その隣にある棚にもたれて眠るフリをする。

この頃になると、1歳児クラスの頃のS子と比べて、明らかに他者に自分を見てもらうことを意識した呼びかけをするようになったと感じられた。

このように、S子の提示的呼びかけの内容を見てみると、まず「気に入ったモノ」、「作ったモノ」、「身に着けたモノ」という「自分のモノ」と実感するモノを他者に見てもらおうと呼びかける姿が見られるようになり、その後、「モノを操作すること」、「友達とかかわっていること」、「面白いこと」、「フリをすること」のように自分のしていることを意識し、「こういうことをしている自分」を他者に見てもらおうと呼びかける姿が見られるようになった。このような提示的呼びかけの内容の変化には、S子の中に「私」という自己の意識がめばえ、はっきりとしてきたことが反映されているのではないかと考える。

#### 4 まとめと今後の研究の方向性

保育所1歳児クラス、2歳児クラスの子どもたちを対象とした参加観察により、この時期の子どもたちの提示的呼びかけについて検討した結果、提示的呼びかけの内容は「自分のモノ」「自分のしていること」と実感できるモノや行為であること、さらにそこには単にそのモノや行為を見せたいというだけでなく、様々な思いが込められていることが考察された。

このような提示的呼びかけには、季節の変化、保育者が提案する遊び、園内の遊具等によって子どもたちがどのようなことに興味をもち、遊ぶことを楽しむのかが関係していた。例えば、様々な遊具等のモノを用いながら自分の体を動かして遊んだりモノを操作して遊ぶ時や、モノを作って遊ぶ時には、「自分のしていること」を意識しやすく、「その遊びをしている自分」を実感することも多いために、他者に見てもらいたいという思いも生まれやすいと考えられた。

また、保育所の生活は様々な遊びを楽しむ一方で、食事、着替え、午睡など毎日同じように繰り返される生活があるが、そのように繰り返される生活があるからこそ、普段と違うことを見つけたり作り出すことに楽しみを見出し、その楽しさを他者にも呼びかけて伝えたいという思いも生まれるのではないかとすることも考えられた。

時には子どもの呼びかけに戸惑ったり、その意図がすぐにはわからず、ただ一生懸命見ていることしかできない場合や、意図はわかっているにもかかわらずすぐには応えられない場合もあり、このような子どもたちの呼びかけを受けとめていくことの難しさも感じた。提示的呼びかけを受けとめ、子どもとやりとりすることは、その子どもの「[私]という自己の意識」のめばえのためにも重要であるが、そのためには一对一のやりとりを大切にすることが欠かせないことも提示的呼びかけが生まれた場面の検討から確認できた。

今後の課題としては、提示的呼びかけの内容の変化を追うことに加えて、呼びかけの相手の変化について検討することが挙げられる。

今回収集した事例では、提示的呼びかけは友達よりも保育者に対してが多く、保育者の中でも事例を収集した筆者以外では、挙げた事例からもわかるようにa先生に対してが多かった。この結果には、今回の事例収集時期が関係している。特に2歳児クラスでの事例収集時期は、a先生以外の新しい担任保育者と子どもたちが関係を築きつつある時期でもあり、a先生への呼びかけが多くなったのは当然といえよう。今後、呼びかける保育者に変化が起こるのか、現在も継続中の参加観察をもとにさらに事例をまとめて検討していきたい。

また、友達への呼びかけの事例数は少なかったが、月齢の高いA男やB子には比較的良好に見られたことから、今後全体的にも増加していくことが予想されるので、友達への呼びかけの変化についても、さらに事例をまとめて検討していきたい。

そして、提示的呼びかけの場合の事例に加えて他者と「並ぶ関係」で見られることを呼びかける場合の事例についてもまとめ、一人ひとりの子どもの中でこの二つ場合の呼びかけがどのように見られるのか、そこには「[私]という自己の意識のめばえ」がどのように表れるのかについても検討していきたい。

## 引用文献

- 福崎淳子, 幼稚園新入3歳児の遊び場面における「みてて」  
発話, 保育の実践と研究, 第5巻第2号, pp42-59,  
2000
- 福崎淳子, 幼児の「みてて」発話にみられる関係の構造分  
析, 日本女子大学紀要 家政学部, 第48号, pp17-  
23, 2001 a
- 福崎淳子, 「みてて」発話からとらえる新入3歳児の他者関  
係一個性の視点からの検討一, 保育の実践と研究, 第  
6巻第2号, pp14-31, 2001 b
- 福崎淳子, 「みてて」発話からとらえる幼児の他者意識一見  
せたい相手はだれか一, 保育学研究, 第40巻第1号,  
pp83-90, 2002
- 福崎淳子, 幼児の「みてて」発話一見せようとしているモノ  
は何?一, 保育の実践と研究, 第8巻第2号, pp47-  
55, 2003
- やまだようこ, ことばの前のことば一ことばが生まれるすじ  
みち一, 新曜社, 1987

## 謝 辞

本研究のために参加観察の機会を与えて下さり、受け入れ  
て下さった保育所の先生方と子どもたちに感謝申し上げます。